

モンテーニュの思索の歩み

——「エッセー」の構造とその論理に見る——（その七）

竹 田 英 尚

Montaigne, sa Vie et sa Pensée, dans le Développement de la Structure et de la Logique des Essais (7)

Hidenao TAKEDA

第一章の（6）初期の著作の経緯

モンテーニュが「エッセー」の一章を書き起こしたのはおよそ1572年、彼が39才の頃であると言われている。ボルドー高等法院の職を辞してから二年ほどのことである。退官を記念して書斎の壁に刻んだ引退の辞には、学芸を閑暇の友として「博識な処女の胸」に憩う願望が語られていた。またすでにモンテーニュはレーモン・スボンの「自然神学」の翻訳者であった（1569年出版）。哀悼の意をこめて自ら刊行した「ラ・ボエシ著作集」（1571年出版）の中で、彼が友の作品や翻訳の一つ一つに添えている献辞は、徳や幸福や理性などについての思想を織り込んだ文学的な小品であった。モンテーニュが「エッセー」を書き始めたとしても、別に不思議ではなかったかも知れない。しかしそれらのことは「エッセー」執筆の理由まで教えてはいない。著作はまた異なった精神活動であり、モンテーニュの新しい生活の始まりである。モンテーニュが「エッセー」の筆を執った動機は何であろうか。これが1572—73年の執筆第一期を考察する第一章の最後の問題である。

モンテーニュは「エッセー」の中で自身の作品を反省して語ることがある。もちろん執筆の理由に触れている所もある。それが問題を解く大切な鍵であることは言うまでもない。しかし残念ながらモンテーニュの言葉ですべてが明らかになるわけではない。言葉の意味する所や言葉の足らざる所に私達の解釈が必要となるのは常の事であるとしても、モンテーニュ自身最初からはっきりと作品の意図や方法論を胸に懷いていたわけではないように思われる。彼の作品論は少しずつ書き綴ってゆく中で獲得した折々の発見であるようだ。それは著作の進展のある一過程における自覚を表わしているにすぎない面がある。生きるという変遷進化の中の折々の散録ということが表題「エッセー」が表わしている一つの性格かも知れない。執筆第一期に書かれた章にある作品論もとても同期のものすべてを説明しているとは考えられない場合がある。同期の一つ一つの章の解釈に問題が帰着する次第である。それ故に私達は執筆動機の問題を第一章の最後で取り上げたのである。今まで私達は常に「エッセー」という作品の形態に視線を注いで来た。いかなる論理によって、いかなる構造の上に作品を構成しているか、この分析がすべての考察の挺子であった。この方法は最後の問題に当たっても有効であると思われる。モンテーニュ自身の作品論を検討解釈する有力な助けとなるであろう。当然のことながら一つ一つの

章が何よりも雄弁にモンテーニュの著作行為を告げ知らせているからである。

「無為について」という題をもつ第一巻第八章が恐らくモンテーニュが自身の作品について記した最初の証言であろう。この章は「エッセー」執筆の経緯を最も直接的に述べている一つでもある。執筆年代を第一期に推定できる章にある数少ない作品論の中で、執筆動機についての随一の証言である。私達の構造と論理の分析を挺子にした今までの考察は何よりもまず第一巻第八章の言葉と照らし合わされなければならない。次がその全文である。

われわれが見るとおり、土地がどんなに豊饒で肥沃であっても、遊ばせておくといろんな種類の無益な雑草が絶えず繁茂するから、これをわれわれのために働かせるには、秩序正しく何かの種を播かねばならぬように、また、女は一人でも形のない肉塊を生むことはできるけれども、立派で自然な子供を生むためには別の種を植えつけねばならぬように、精神についても同じことが言える。われわれは精神を何か束縛するものに没頭させておかないと、それはあっちこっちと、茫漠たる想像の野原にだらしなく迷ってしまう。また、精神はこういうふうに動揺していると、ありとあらゆる狂愚と夢想を生み出す。

あたかも病人の夢想のように、精神はむなしい妄想を生み出す。

確固たる目的をもたない魂は自分を失う。なぜなら、人も言うように、どこにでもいるということはどこにもいないということだから。最近、私はできる限り、いくらか余生を平穏と隠遁のうちに送ること以外には心を煩わすまいと決心して、自分の家に退いたが、私の精神をして、完全な無為のうちに過ごさせ、それ自身を育ませ、それ自身の中に安住させること以上に、これを大切にする方法はないように思った。これは、今後私の精神が年と共に力強くなり、円熟を増すようになれば、ずっと容易にできだろうと希望していた事柄である。しかし、私は、

無為は常にさ迷う精神を生む。

とあるように、精神は逆に放れ駒と同じく、自分のこととなると他人のために動くときよりも百倍も多く心を労することを知っている。また、私には妄想や空想の怪物があまりにもたくさんに、次から次と生まれて来るものだから、私は、これらの愚にもつかぬ奇妙さを、後でゆっくり眺めようと思って記録することを¹⁾はじめた。時が経てば、私の精神がそのことで自分自身を恥かしく思うようにと望みながら。

閑居の日々を送る心の動きを描き、「エッセー」執筆の経緯を語っているモンテーニュの言葉に曖昧な所はない。無聊に苦しむ精神に確かな仕事を与えるために筆を執ったとしても不思議ではない。ところが彼が書き始めたという作品の説明は、その字義通りに理解して、現実の「エッセー」に当てはめることができそうもないのである。これまで私達が考察した「エッセー」がはたして「妄想や空想の怪物」(《chimères et monstres fantasques》)を記録したものと言えるであろうか。「エッセー」は歴史的事例や故事逸話が古人の思想や詩句と綴り合わされたものであった。モンテーニュなりの考えがそれらの構成を司っていたとしても、彼自身の思想を記録した所は殆どなかった。モンテーニュの「空想の怪物」が跋扈していたとはとても思われな

いのである。

ルネッサンスの世紀にあっては「狂愚」や「夢想」を記録するとしても、その形式が現代とは異なることは十分に想像される。多かれ少なかれ古代の範例や史実や金言など種々の知識で飾られることであろう。その様な知識がちりばめられてあっても、著者の随想が主体であるならば、それは「空想の怪物」の記録と言えるかも知れない。「空想の怪物」という言葉は何ら奔放で活潑な想像を意味せず、とりとめのない随想を卑下した形容と考えられなくもない。歴史的事例や故事や古人の思想や詩句を綴り合わせることも、モンテーニュ自身の随想を記しとどめた色合いの強い章ならば、第一巻第八章で彼が書き始めたという作品に当たると見做すこともできよう。そのような章がわずかながら存在する。今までモンテーニュの思索の歩みというテーマに直接の関係がなく、数も少ないため取り上げる機会のなかった最後のタイプである。第八章の証言が指している作品は結局次のような章以外には考えられない。

第一巻第十章 弁舌の遅速について

どんな人にもあらゆる長所が与えられたことはない。

そこで、われわれが見るように、弁論の才能において、ある人たちは軽妙さと敏捷さをもち、いわゆる当意即妙の才をもっているから、どんな場面にあっても答えられるが、ある人たちは緩慢で、急入りに練って、あらかじめ考えてからでないと何もしゃべれない。だから、たとえば、ご婦人方に向かって、彼女らのもっとも美しい長所に従って遊戯や運動の種類を選べと教えるのと同じように、もしも私が、今日では主として説教家と弁護士との職業となっているように見受ける弁論術において、この二つの相反する長所について意見を述べるとすれば、緩慢な人は説教家に、敏捷な人は弁護士に向いていると言いたい。そのわけは、説教家は仕事の性質上、準備に十分の暇があり、その走るコースはまっすぐに続いていて中断がないのに反し、弁護士は融通自在であるために、常に論争に飛び込まねばならず、また、相手方の思いもかけぬ返答によって調子を狂わされれば、即座に新しい方策を立て直さねばならぬからである。

しかし法王クレメンスと国王フラソソワとのマルセーユにおける会見ではこれとまったく逆のことが起こった。すなわち、弁護士席で一生飯を食い、その道では令名の高かったポワイエ殿が法王に向かってする演説を引き受け、それを長い間かかって準備し、いや、噂によればすっかり出来上がった演説をバリから携えていった。いよいよその演説がおこなわれる日になって、法王は列席した他の国々の王侯の使節たちの気分を害するようなことがしゃべられてはと心配して、国王に対し、時と場所柄にもっともふさわしいと思われる題目を命じた。ところがたまたまそれはポワイエ殿が苦心して作っておいたものとはまったく別種の事柄だった。そこで彼の演説は無駄になり、早急に別のものを作り直さねばならなくなった。しかし彼は自分にその力がないことを悟ったので、枢機卿デュ・ベレが代りをつとめた。

敏捷で急速な働きは機知の役割であり、緩慢で慎重な働きは判断の役割であるように思われる。しかし、準備する暇がないと全然しゃべれない人や、暇があってもあまりうまく

しゃべれない人は同じ程度に特異である。伝えるところでは、セウエルス・カッシウスはあらかじめ考えておかないほうがうまくしゃべれて、勤勉よりも好機のおかげを受けた。そして、話の途中で妨害される方がかえって得だった。だから敵側は怒りで彼の雄弁を倍加するといけな^いというので刺激しないようにしたそうである。私は熱心にあらかじめ考えておくことに堪えられない性質の人があるのを個人的な知り合いや普段の経験から知っている。こういう性質の人は記憶力が貧しく、話題を選んで按配するのが無器用である。また緊張が激しいとかえって考えが乱れる。われわれはある作品を評して、油と灯心の匂いがする、というが、それは大部分努力だけでできた作品の中には何かしら生硬な、ぎすぎすした調子が刻み込まれているからである。だがそのほかにも、うまく作ろうと心をつかい、その企てのために緊張しすぎるのが、精神の働きを妨げ、かき乱すのである。

いま私が話している性質の人には、また同時に、カッシウスの怒りのような（この働きはあまり激しすぎるかして）激しい感情によって動かされ刺激されることを欲しないということもある。つまり揺すぶられることではなくて、うながされることを欲するのだ。それは外からの、その場の、偶然の原因によって活気づけられ目覚まされることを欲する。それはたった独りでは弛緩し、萎縮するだけである。動揺こそはその人の談論の生命であり魅力なのだ。つまらぬものにも強いて優劣をつけて比べれば、著述よりも話談が真価を表わすと言えなくもない。

私達にはこのような随想を「空想の怪物」の記録と形容するのは些かためられることではあるが、この章ではとにかくモンテーニュの論述が優勢である。この点では今まで調べた章とははっきりと違っている。「空想の怪物」はこのような随想を彼なりに表現したものと考えねばならない。従来第八章の言葉は初期の作品様式を指し示していないと見做された。初期の「エッセー」には「空想の怪物」は認められない、と言って片付けられた²⁾。しかし第八章はのちのモンテーニュの回想ではない。執筆時期が第一期でも特に最初の頃と推定される章である。その言葉は執筆当初のモンテーニュが語っているのである。彼が全く嘘偽りを言ったのでない限り、彼の言葉は容易に退けられない筈である。第八章の証言は綿密に一つ一つの章に照らしあわせて吟味する価値があり、執筆動機と当初の作品を語る告白として何らかの理由があるものと考えなければならない筈である。

執筆第一期においては第八章の証言に該当する作品は数少ないのは事実である。大部分は故事実例に埋まっている。第八章のような著作態度はごく最初の一時期であったと思われる。また質的な面から見ても、第一巻第十章でも分るように、味読に耐える随想ではない。思索の勢いも思想の成熟も個性的な輝きも乏しい。私達にはやはり「空想の怪物」が「次から次と生まれ」て躍っている随想とは感じられない。第一巻第八章全体がそうであるように、この表現はきわめて心理的なものと思われる。つまり最初に書き記した随想を外から眺め直した反省ではなく、あくまでも自己の内面から執筆に駆り立てる心理的な動揺を表現したものである。

「空想の怪物」はモンテーニュの内部の眼に映る動きであり、必ずしも客観的な存在を意味しているわけではない。これは第八章の書き振りからしても、殊さら言い立てる必要もない程当然のことである。随想が主体である章ならば、その性格がどうであれ、第八章で言っている作品に当たると見做すべきなのである。第八章の言葉は現実の「エッセー」についての客観的な証言としては齟齬があるのは当然のことであり、モンテーニュの最初の著作行為はこのような内

部と外部との齟齬の上に成り立っていることを教えているのである。「空想の怪物」は自分の思想を謙遜した形容であると言うよりも、「茫漠たる想像の野原にだらしなく迷」っている精神の動揺そのものである。それはまだ思想と感情が不分明に混濁した意識の動きである。恐らくそれは官職の桎梏から解き放たれた精神の中に何かが生まれ始めた胎動であっただろう。自己自身に帰ったモンテーニュの自我が「博識な処女の胸」に憩う閑居の中から新しい存在様式を作り出そうとする欲求でもあろう。しかしモンテーニュ自身の内部の眼から見れば「空想の怪物」はすでに鮮やかに思想的な形貌をもって「次から次と生まれ」ている。彼はそれを記録しさえすれば良いと思った。無為の苦しさは和らぎ、精神は確かな目的を得るはずであった。しかしながら私達が現実「エッセー」を見ると、第八章の証言に相当する章は短い小品であり、随想の勢いも個性の輝きも乏しい。そのような章はわずかししか書かれていない。第八章のような著作方法は成功しなかったのである。いざその相貌を描いて記録しようとした時、モンテーニュが見ていた筈の「空想の怪物」は多くは捉えどころなく霧消したであろう。それは表現によって思想の体裁を整えようとする、多くは掌中から逃れ去るほど模糊としたものだったに違いない。のちになるとモンテーニュは執筆の動機を次のように説明する。

私にものを書いてみようという夢想を起こさせたのは、ある憂鬱な気分、したがって、私の生れつきの性格とは大いに相容れない気分の、仕業なのです。その気分は、私が数年前から飛び込んだ孤独の淋しさから生まれたものなのです。それから、私には他に書くべき材料が何もありませんので、私自身を私の前に差し出して、これを材料とも、主題ともしたわけなのです。³⁾

第一巻第八章では「空想の怪物」こそ作品の材料となるべき記録の対象であった。ところが第八章から五、六年後に書かれた上記の章では、執筆の理由を退官後の生活から説いていることに変わりはないのに、もはや「空想の怪物」に類した言葉は全然見られない。「ある憂鬱な気分」の思い出だけが残っているように、「空想の怪物」は殆ど思想ではなく、新しい生活を始めたモンテーニュの感情や欲求の動きの投影だったのである。従ってそのような志向にかなった「私」という主題を発見した今では、モンテーニュには「書くべき材料が何も」なかったと思われる。「空想の怪物」はもはや「ある憂鬱な気分」と変わりはないのである。（尚上の引用部は最初から「私」が「エッセー」の「材料」や「主題」であったような書き振りなので、注意を要する。モンテーニュが「エッセー」の「主題」として自ら認めうるものは「私」しかないとしても、彼がそのような「エッセー」を書き始めるのはそう早い時期ではない。引用部では「エッセー」の「主題」として「私」を発見するまでの経過が全く書かれていないのである。）

第一巻第八章のモンテーニュの証言にもとづいて、館に退いて最初に書き始めた「エッセー」が第一巻第十章のようなものであるとするならば、「エッセー」の作品形式の起源について再検討が必要となる。執筆第一期のものが大部分当時流行の範例集や教訓集などの撰集、編纂の文学と酷似しているとしても、モンテーニュ自身が最初書いたと言っている作品は彼の随想が主体になっているのである。知識の事典的な寄せ集めのような文集に比べれば、「空想の怪物」の記録と表現してもおかしくない作品である。あるいは「エッセー」⁴⁾の起源を、モンテーニュがニコル・ジルの「フランス年代記」の余白に記したような読書メモの発展と考えることも適切とは思われない。確かに第一巻第十章では、法王クレメンスと国王フランソワの会見とセウエルス・カッシウスの雄弁の話は読書の知識であり、モンテーニュの随想は相当この二つの例に

頼っている。この章は例に拘泥する所が少なく、随想の自由な歩み振りも感じられるが、読書の註釈の発展形と見做せなくもない。しかし一方「空想の怪物」の記録に当たるタイプの章の中には、付属的な一部でしか読書の知識に頼っていないものがある。たとえば第一巻第三十二章の随想は明らかに現実の事件が糸口である。モンテーニュがこの章を書く「数ヶ月前」、1571年10月5日に始まったレバンートの海戦であり、フランス宗教戦争におけるロッシュラベユの戦闘（1569年6月23日）やモンコントゥール（1569年10月3日）やジャルナック（1569年3月13日）の戦いをめぐる新旧両派の議論である。第三十二章が読書メモにもとづかない随想であるのは明白であり、書誌的な事例を必要としないだけに一層「空想の怪物」の記録であると言えよう。この様な章が一方にあり、第十章には書誌的な事例に拘泥しない歩み振りが感じられる限り、両者合わせて第一巻第八章でモンテーニュが最初書いたと言っているタイプの作品であると考えべきであると思われる。切掛が読書であれ時事であれ、モンテーニュの随想の展開が著述を導いているからである。この点が他のタイプと最も変わった特色だからである。

第一巻第八章のモンテーニュの証言にもとづくと、「エッセー」の作品形式の発端は、「フランス年代記」に付した読書メモの延長のようなものでもなく、当時流行の範例集や教訓集などの編纂文学でもない。モンテーニュの経験の中から最も似ているものを探すとすれば、「ラ・ボエシ著作集」の献辞ではないだろうか。それはただ献呈の挨拶の言葉ではなく、モンテーニュの思想をあわせ織り込んだ随想であった。閑居の無聊に苦しむ彼の胸の内に、親友のために随想を書き綴った経験が蘇って来ても不思議ではない。生前の交際を追懐して、「彼を失ったその日から、ただ物倦く生きながらえているだけである」と言って憚らない心の友ラ・ボエシの著作集の思い出は、亡友に代わってモンテーニュの余生の友となるべき「エッセー」にもっともふさわしい執筆の端緒であろう。

モンテーニュは作品の構想を練った上で「エッセー」に取り掛かったわけではない。彼が第一巻第八章で述べていることは作品のプランとは言えない。結局は彼を執筆に駆り立てる精神の動揺を語っているにすぎない。従って「エッセー」を書くことはこの新しく生まれた不安を昇華する著作の在り方を模索しつつ進むことである。モンテーニュは執筆を重ねる中から段々と自身の著作の真の意図を発見してゆく。第八章では「空想の怪物」を記録する方針を定めた筈であるが、該当する章の数は少ない。そのような著作は長くは続かなかったであろう。やがて彼の「精神を束縛」し「没頭させて」、無聊の苦しみを和らげるものが再び必要となる。モンテーニュは読書から古代の史実や歴史的、道徳的逸話を集め、註釈を加えつつ金言や詩句と一綴りにするような著作を採用する。私達が「フランス年代記」の所蔵本に見たような、克明なメモを加える読書習慣をもつモンテーニュは難無くこのような「エッセー」に移ることができた筈である。⁵⁾ 周囲には当時流行の範例集などの手本もあった。私達が前回まで考察して来たような作品が第二の段階である。それらの章は多数の本から借り集めた知識に埋まり、殆どモンテーニュが自分の思想を表明することはなかった。ではこのような著作はモンテーニュの精神をどのように「束縛」し「没頭させ」たのであろうか。私達は前回までの作品分析において、読書の知識の集録簿のような外見をしている章にも、その底にはモンテーニュなりの思索の跡があることを明らかにした。机上の知識を組み立てる構成にモンテーニュ的な個性があり、そこに彼の思考法が現われていた。モンテーニュ自身はそれを次のように説明する。

判断はあらゆる事柄に適用される道具であり、また、何にでも首を突っ込む。だから私

は、ここで判断の試験をするのに、あらゆる機会を利用する。たとえ、それが私にまったくわからない事柄であっても、私はそれに自分の判断を試してみる。まず、遠くから瀬踏みをしてながら、そうして、それが私の背丈では深すぎるとわかると、私は岸にとどまる。これ以上先へ進めないとわかることが、判断の一つの特色なのだ。いや、判断がもっとも誇りうる特色の一つなのだ。時には、空虚な、つまらぬ事柄に対しても、私は、判断が何かそれ自身のために実になるもの、支えとなるものを見いだしはしないかと試してみる。時には、私は、判断を高尚な全く論じつくされた問題の前に連れてゆく。そこには判断が自分で見いだすことのできるものは何もない。その道はすっかり踏み固められているから、判断は他人の足跡についてゆくことしかできない。そこでは判断は、自分にいちばんよいと思われる道を選ぶのが仕事である。そして何千とある道の中から選択して、これがもっともよかったとか、あれがもっともよかったとか言うのである。その上私は問題の採扱は偶然に任せる。私には、どれもがみんな結構なのだ。

モンテーニュは表題「エッセー」と同じ語（「試験」, 《essai》）を使って著作の目的を語っている。この第一巻第五十章が書かれた年代は、彼が自分の作品について明瞭な方法的自覚を獲得した時期を教えてくれる筈である。しかし残念ながらピエール・ヴィレーの研究は確かな年代決定に到っていない。1572—73年執筆期の終り頃と推測できなくもないが、根拠はまだ薄弱であると言う。

私達の研究は何ら章の執筆年代を決めうる客観的な事実を発見するためのものではないが、私達なりに推察することが許されるならば、やはり1572—73年執筆第一期の終り頃と判断すべきであると思われる。第一巻第五十章でモンテーニュが語っている自分の著作についての説明は、私達が執筆第一期の章の構造と論理を分析して知り得た所とよく合致するからである。第一巻第五十章は第一巻第八章で最初モンテーニュが書いたという「空想の怪物」の記録のタイプを言っているのではないことは疑いがない。第五十章はもはや第八章のような作品と内面生活との関係を離れて、自分自身の著作を客観的に捉えた反省が語られている。第八章の時期から相当の隔たりがあると思って間違いはないだろう。著作の意識は明確になり、すでに数多くの章を書いた経験を思わせる。史実や範例を組み立てるような著作を通して、「判断」なるものの機能を適確に把握するに到っている。しかし一方第五十章の「判断」の理解は執筆第二期ほど深くはない。それは以下に詳察する通りである。

私達は章の構造と論理を分析しつつ、ただ史実や逸話を綴り合わせたような「エッセー」の内部に、モンテーニュの思索の活動の有様を探った。第一巻五十章では彼はそれを一口に「判断」と言っている。読書の知識の集録簿とも思われる初期の「エッセー」は、現代の私達には些か無味乾燥であるが、しかし当然モンテーニュ自身はそのような著作にも何か彼を惹きつける魅力を感じていた筈である。それはただ知識の楽しさではなかった。知識の喜びだけならば読書で十分である。著作はそれ以上に精神の個性的な活動であった。史実や逸話を構成することにも自ずと判断力が関与し、判断を試し、働かせる楽しさがあった。モンテーニュは著作活動の内部に「判断」なるものを発見するのである。これは以後彼の「哲学する」ことの核ともなるべき重大な発見である。しかしながら彼が一口に言う「判断」の性格は一定不変のものではない。「エッセー」とともに変遷進化する。それはモンテーニュの思索の発展の指標でもあり、思想の成熟の一面でもある。

第五十章で言う「判断」の一つの特徴は、その練習的な運用にあらう。ここにあるのは人生の折々の状況に強いられた判断の行使ではない。たんに判断を練磨する演習にすぎない。第五十章は、殆ど自己の思想とか経験などとの関係を離れて、ただ練習的に判断を運用する有様を描いている。その判断は余暇の知的な遊びの感じさえる。それは現実の利害と全く無関係な判断だからである。モンテーニュが判断を働かせている裏に、確かな論理的認識が絶望的に思われるような、多様かつ変転定まりない現実が感じられないからである。モンテーニュはのちにそれが判断本来の活躍分野であることを自覚するであらう。第五十章で言っている判断の対象はなまの現実ではなく、執筆第一期の代償的な「現実」である書誌的な事例であると考えてまず間違いはないであらう。第五十章でモンテーニュが比喩的に描いている、「判断を試す」有様を具体的に執筆第一期の章に当てはめることはむづかしい。章の構造と論理の分析によって、事例をただ拾集、列挙しているにすぎない外見をした章が、実は「明確で強固な判断」を準備している構成であることを知った。そのような章は彼が「遠くから瀬踏み」をしている章であると言える。また「空虚な、つまらぬ事柄」が材料になっている章は少なくない。のちの章に比べて明らかに執筆第一期に多いのである。あるいはモンテーニュが一章全体に渡ってセネカの「書簡」から思想や力強い表現を借用しつつ論を進めたことがあった。また古人の思想を選んで適所に織り込むのは判断の練習法の一つでもあった。それらはまさに「他人の足跡についてゆく」だけの章であり、「選ぶのが仕事」であるような著作である。

練習的な活用の段階の判断はその対象にも全くこだわらない。「まったくわからない事柄」でも、「空虚な、つまらぬ事柄」でも、「全く論じつくされた問題」でも、選ぶことをしない。「どれもが、みんな結構な」のである。モンテーニュは現実の論理的な認識が不可能だから判断を重んじているのではない。判断は「あらゆる事柄に適用される道具であり、また何にでも首を突っ込む」故に、重宝なのである。こうしてモンテーニュは判断の運用自体にきわめて特異な価値を与える。判断の運用の意義はその対象もその結果も超越している。モンテーニュは何ら判断を働かした結果もその対象も顧慮することなく、ひたすら判断の機会を大切にする。彼の「判断の試し」が知的な遊びの感じさえるのはそのせいでもある。かつての「空想の怪物」とは打って変わって、「判断の試し」の著作には内面生活の脈動が微弱な側面がある。しかし判断を働かせることは「茫漠たる想像の野原にだらしなく迷う」精神の動揺を鎮めてくれるであらう。対象にも結果にも全く無頓着に、ただ判断の機会を喜ぶ心理的な理由がそこにある。

執筆第一期の「判断の試し」が知的な遊びの風があるとしても、モンテーニュの思索が真面目さを欠いているわけではない。それはただ「試す」ことに由来する寛ぎであらう。「試す」対象が取消しの利かない現実ではなく、読書で出会う例であることに気楽さがあらう。しかしモンテーニュはただ机上の知識を弄んでいるわけではない。ただ机上の演習にすぎないならば、彼の精神の動揺を鎮めることはできなかったであらう。精神は相変わらず知的な遊戯の空しさの中をさ迷ったであらう。書誌的な事例は現実の時間的、空間的な延長であった。モンテーニュにとって現実の世界と書誌的な事例の世界の間に裂け目はない。ルネッサンスは旺盛な現世的関心を先ず古典理解によって処理しようとした。現実的な問題の解決の指針は古典が提供するもののどこかに必ず見出されたのである。モンテーニュについても同じことが言える。書誌的な事例への信頼は古代ギリシャ・ローマへの信頼と同じである。初期の「エッセー」の書

誌的事例の底にあるのは強い現世的関心であり、たんに読書人の好き心が事例を集めているのではない。この健全な現世的関心によって事例が現実の生気を帯びるのである。従って現実と等しい事例に対して判断を試みることは、現実的な行動の状況における判断の行使にも似た代償的な行為となる。事例を判断することは、「どこにでもいる」がまた「どこにもいない」ような閑居の中の魂にとって、ある種の鎮静作用をなす。モンテーニュの精神を「何か束縛するものに没頭させ」、現実の行動に代わって、「空想の怪物」を鎮めてくれる。執筆第一期のものにはそれが顕著に現われた章が数多くある。たとえば次のような章は極めて現実的な行動の問題を扱っている。

「包囲された軍の大將は談判のために城を出るべきか」(I—V), 「講和のときは危険であること」(I—VI), 「不屈について」(I—XI), 「国王の間の会見の儀礼」(I—XIII), 「理由なく城を固守するために罰せられること」(I—XV), 「臆病の処罰について」(I—XVI), 「ある使節たちの行為」(I—XVII) など。

これらの問題は、もしモンテーニュが法服の貴族の道を歩みつづけたならば、社交の会話の中で、あるいは現実に行動の中で当面したに違いない問題である。種々雑多な事柄を取り上げている執筆第一期において、このような貴族的な章が多いという特徴がある。それは、まだ本当に自己の内面の衝動を実現する著作にも達せず、官職に代わる行動の場もない動揺の中で、「判断の試し」が存在感の稀薄な閑居の不安を鎮めるための代償的な行為であったからであろう。「エッセー」を書きつつ判断を試みるのが、「どこにでもいる」がまた「どこにもいない」ような無為の中で「空想の怪物」に悩む煩悶と、現実の行動に伴う「隷属」¹⁰⁾や「重責に倦み疲れ」¹⁰⁾る苦しさとの間に均衡を保つ行為であったからであろう。従って「エッセー」はまだ進化しなければならない。「エッセー」は完全に過去のモンテーニュの殻を脱して、「自身を育」み、「自身の中に安住」する自我を形成するものとならねばならない。「実習について」の章における「自己」という主題の発見はそのような新しい存在様式の方へ発展してゆかなければならないはずである¹¹⁾。「判断の試し」の著作は、かつて「空想の怪物」に悩んだ自我、自己の表現を求めた自我を置き忘れているところがある。無位無官の新しい生活を決意したモンテーニュの自我の欲求を満足させるものとは言えない。「エッセー」は閑居の中で「どこにでもいる」がまた「どこにもいない」ような自我に新しい存在感を与えるものでなければならないはずである。モンテーニュはまだ「エッセー」という著作の真の在り方を模索しつつ歩まねばならない。

(第1章終り)

〔註〕

- 1) 原二郎氏の訳(筑摩書房世界文学大系)を拝借。但しこの論文の方法に従い、1580年版にあわせて訳を修正し、それを下線で示している。以下同様。
- 2) Cf. P. VILLEY, *Les Essais de Montaigne*, Nizet, p. 30; G. LANSON, *Les Essais de Montaigne*, Mellottée, p. 43.
- 3) II—VIII, p. 66—p. 67; p. 275—p. 276; 前者はすでに紹介した1580年版「エッセー」のページ数、後者は訳を拝借した「エッセー」のページ数である。以下同様。
- 4) I—XXVII, p. 271; p. 144.
- 5) 拙稿モンテーニュの思索の歩み(その二), 天理大学学報第88輯参照。
- 6) I—L, p. 459—p. 460; p. 217.
- 7) 拙稿モンテーニュの思索の歩み(その三), 天理大学学報第90輯参照。

モンテーニュの思索の歩み

- 8) とともに拙稿モンテーニュの思索の歩み（その五）、天理大学学報第94輯参照。
- 9) 拙稿モンテーニュの思索の歩み（その四）、天理大学学報第92輯参照。
- 10) いずれも書斎の壁に刻まれた引退の辞より。次のような文脈において使われている。「……満三十八歳に達したミシェル・ド・モンテーニュは、すでに久しく、高等法院の隸属と公務の重責に倦み疲れているので、まだ血氣盛んではあるが、博識な処女の胸に引退して、余生を安楽のうちに送らんとするものである。」
- 11) 拙稿モンテーニュの思索の歩み（その六）、天理大学学報第97輯参照。